

## W・M・ヴォーリス

ワン・パーパス

## 「共なる志」に献身した同志

本井 康博

(大学神学部教授)

## ●「カサブランカ」

「ワン・パーパス」のメロディーが、突如「カサブランカ」で鳴り出す。

「君の瞳に乾杯！」という決め台詞で話題を呼んだアメリカ映画（1942年制作）である。ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマン共演の傑作である。第二次世界大戦下、フランス領モロッコの首都、カサブランカが舞台。

あるカフェで、敵役のドイツ人将校たちが「ラインの守り」を斉唱し始めるや、愛国心に駆られたフランス人たちが、フ

ランス国歌「ラ・マルセイーズ」で対抗し、やがて歌声はドイツ軍歌を圧倒する。

この「ラインの守り」はマックス・シュネツケンパーガー作詞（1840年）、カール・ウイルヘルム作曲（1854年）のドイツの歌で、普仏戦争（1870年）の際には国歌のように愛唱された。



ヴォーリス（前列右から3人目）を迎えて（現、啓明館前。1930年11月11日。前列中央は大工原銀太郎同志社総長）

曲が同志社カレッジソング「ワン・パーパス」と同じなのである。

映画では当初、「ラインの守り」ではなく、ナチスの党歌「ホルスト・ブツェル」が候補に上ったという。不幸にもナチスに利用されたために、「ラインの守り」は戦後のドイツでは、歌うのが憚られている。いまでは「カサブランカ」や「ブルーマックス」（アメリカ映画、1966年）、「大いなる幻影」（フランス映画、1937年）などで耳にするくらいである。



妻の柳満喜子と佐々木伸尚  
（『今生きるヴォーリス精神』から）

ドイツで評判を落とした曲が、なぜ同志社で歌われることになったのか。実は、カレッジソングの方が、ナチスよりはるかに古い。1908年の作詞だからである。

## ●詩人

当時、同志社大学教員のシドニー・ギューリックが合唱好きの学生、片桐哲（同志社グリーククラブ創立者。後に同志社女子大学長）らにイエール大学の歌集を与えたところ、学生が「同志社にも校歌を」と所望した。ギューリックがさっそく作詞を依頼したのは、W・M・ヴォーリスであった。

「君はアメリカの雑誌にたびたび詩を発表しているが、ひとつ同志社のために作ってみてはどうか」と。フランク・ロンドンバード（同志社）も勧めた。ヴォーリスは失職直後で、おりしも京都三条YMCA会館の工事現場監督として週に三日、琵琶湖畔から通う身であった。宿泊はロンドンバード邸、食事はJ・D・デイヴイス邸で世話になっていた。

ヴォーリスと同志社との繋がりには、これより3年前、彼が近江八幡に赴任した10日後から始まる。彼は来日直後に、かねて聞いていた同志社をさっそく視察した。以後、3年間にわたって何度も足を運んだ。だから、作詞依頼は彼には「非常に光栄欣快」であった。曲はイエール大学（同志社ではD・W・ラーネッドの母校）校歌のメロディー（これが「ラインの守り」を借用した。「最も青年らしく、元気に満ち満ちた」曲、だからである）。

歌詞は一節から神のため、同志社のため、祖国のため、と三節まで歌い、四節で「世界同朋のため」と締めくくる。だから、作詞家自ら「必ず四節も歌ってほしい」と願う（ワン・パーパスの回顧「同志社校友同窓会報」1952年2月28日）。この点は、西郵辰三郎（元香里中・高等学校教諭）の証言とも符合する（西郵辰三郎「同志社カレッジソングとひとつの思い出」67頁、『同志社時報』65、1978年）。

ヴォーリスは詩情豊かな「芸術的天分」に恵まれ、音楽を能くし、詩を作った

（竹中勝男『ヴォーリス先生』、『同志社校友同窓会報』1934年11月15日）。学生時代にすでに詩集を自費出版している（奥村直彦『ヴォーリス評伝』46頁、港の人、2005年）。来日後も*Poems of the East and West* (1960) などを出版している。なお、『讚美歌』では236番「神の国」（1910年）が彼の作詞である。

## ● 建築設計

作詞以外でもヴォーリスは多才である。なかでも建築設計士の知名度は抜群である。が、本格的な専門訓練は受けていない。ほぼ独学である。コロラド州のイースト・デンバー高校を卒業後、建築家をめざしてコロラド大学（創立は同志社と同年。しかも会衆派）に進学した。しかし、在学中に外国伝道に目を開かれ、理系コースから哲学コースへと転科し



同志社アーモスト館（右手は啓明館）

た（『ヴォーリス評伝』38頁）。けれども日本赴任後に教員を失職したのを契機に、1908年、アマチュア建築家ながら京都YMCA（理事長は佐伯理一郎）の一室に、教え子の吉田悦蔵、村田幸一郎の協力を得て設計事務所（後のヴォーリス建築事務所）を始めた。2年後に帰国して建築技師のレスター・チーピンと再来日し、吉田を加えて3人で合名会社を立ち上げた。ヴォーリスが手がけた建築作品は千六百を超える。同志社大学（今出川校地）にも4棟存在する。啓明館（書庫は19



新島遺品庫（背後は啓明館）

15年、本館は1920年）、致遠館（1916年）、同志社アーモスト館（1931年。2005年に登録有形文化財に指定）、それに新島遺品庫（1942年）である。

## ● 同志社との繋がり

同志社との縁は、校歌や建築だけではない。理事や評議員として同志社の経営に尽力している。同志社理事会が1930年9月30日に「社友」に推薦した時、ヴォーリスは祝賀会（同年11月11日、デ

ントン・ハウス）のために来学した。意外に知られていないのが、諸大学での教鞭である。1942年4月の京都帝大文学部講師就任に続いて、6月には同志社大学講師となった。さらに10月には東京帝大文学部講師（年俸千五百円）を委嘱され、ワーズワースやテニソンなどを講じた（『ヴォーリス評伝』240頁）。

同志社の『職員録』では、1943年度 文学部講師 英作文、1944年度 法学部教授、1945年度 不明、1946年度〜1947年度 文学部客員教授、とある。科目は英作文以外、不明だが、山本文雄元梅花学園長は「1946年に文学部神学科で詩篇を習った」と証言する。

## ● 教育者

もともとヴォーリスは教育者として人生のスタートを切った。今より101年前の1905年、24歳の青年教師（英語科）として来日した。赴任地は近江八幡の滋賀県立商業学校（現滋賀県立八幡商業高等学校）であった。かたわら膳所中学校や彦根中学校でも教えた。膳所では新任の英語教師に南石福二郎（のちに同志社大学予科教授）が、また、各校の教え子に吉田や村田、それに清水安三（桜美林学園創立者）などがいた。けれども、ヴォーリスはキリスト教伝道の故をもってまもなく公立学校を追われた。ならば私学、とばかり、妻（満喜

## ● 信徒・伝道者

さらにヴォーリスは宣教師魂をもった篤信の信徒である。幼児のころ、長老派教会で受洗した。近江に赴任直後から自宅でバイブル・クラスを開いたため、わずか2年で教師を解任された。1907年、ただちに吉田と滋賀県下の教化を目的として「近江ミッション」（近江基督教慈善教化財団、現財団法人近江兄弟社）を立ち上げた。

以後、ガリラヤ丸による琵琶湖沿岸伝道に尽力した。最盛期には米原や八日市など各地にキリスト教会館が建てられ、近江八幡を要にした伝道ネットワークが



到遠館（右手は啓明館）

形成された。

その後、1912年にキリスト教家庭雑誌『湖畔の声』（近江兄弟社）を創刊したり、1918年には結核療養のため近江療養院（現ヴォーリス記念病院）を設立した。

一方で、YMCA活動にも早くから意欲的であった。学生時代にすでに大学YMCAに所属した。外国伝道を志望して来日したのもYMCAの斡旋であった。近江八幡では赴任まもない1907年に八幡YMCA会館を設立したが、竣工と同時に商業学校を解雇されたのは皮肉であった。その後、京都YMCA会館の工事監督に従事したことは先に見た。

### ●実業家・フラインソロピスト

こうした社会教育や伝道資金の確保のため、ヴォーリスは実業に取り組んだ。まず、ヴォーリス合名会社（1910年）、ついでヴォーリス建築設計事務所（1920年）と同時に、メンソレータム（現メンタム）の発明者から無償で販売権を得て、近江セールズ株式会社（192

0年、現株式会社近江兄弟社）を設立した。こうしたヴォーリスの経済活動での最大の特徴は、伝道優先である。

「商売をしてもただ金を儲けるのみ、ならば面白くなく、其れにより基督の主義を宣揚するに非らずば、無意義であります」、「金より奉仕」である。開業以来、一銭の貯金もせず、「余分はすべて伝道に捧げました。開社以来、伝道に捧げた金が五十余万円」という（ヴォーリス「近江兄弟社の精神的機構」、「同志社校友同窓会報」1934年11月15日）。

要するに典型的なフラインソロピストである。彼は同志社に対してもこう提言する。

「今日多数の人々は月給がもらえねば働きません。然し、兄弟社に於ては、主義の為め月給の如何に拘はらず働くのであります」。「同志社でも幹部の人々以下が月給を問題にせ



結婚式を挙げた明治学院礼拝堂（ヴォーリスの設計）

ず、主義の為め働くならば、何でも出来ると思ひます」（同前）。

### ●親日家

ヴォーリスは日本が好きで、1919年、旧小野藩主・一柳末徳（慶応義塾卒）の三女、満喜子と結婚した。「私の家内は旧大名華族の出身ですが、一般の人と同様に働きます」（近江兄弟社の精神的機構）。式は自ら設計した明治学院礼拝堂（港区指定文化財）で挙げた。オルガンを奏したのは、友人の同志社大学教員、

E・S・カーブであった。

満喜子は神戸女学院音楽部（ピアノ科）を出て、アメリカ留学（プリンモア・カレッジ予備学校）をした幼児教育専門家であった。1920年に自宅に子どもたちを集めて「ブレイグラウンド」を開始。これが翌年、「清友園」（1年後には幼稚園として認可）へと発展した。

戦時中の1941年、ヴォーリスは日

本に帰化し、日本に残留した。姓名も「二柳米来留」と変えた。「米から来て、日本に留まる」決意表明でもあった。

1957年、軽井沢においてクモ膜下出血で倒れた。翌年、近江八幡市名誉市民（第1号）に推されたが、ついに再起できず、1964年5月7日、7年間に及ぶ無言の闘病生活の末、昇天。八幡市郊外の恒春園に納骨された。夫妻のかつ

ての自宅（池田町）は、現在「ヴォーリス記念館（一柳記念館）」（滋賀県指定有形文化財）となっている。

ヴォーリスは、「ワン・パーパス」（同じ志）の歌詞通りに、神と祖国（日本）と同志社、ならびに世界同朋のために後半生を捧げ尽くした。まさに、神に忠実な「同志」であった。



ヴォーリスが手がけた啓明館（旧図書館）

### ウィリアム・メレル・ヴォーリス (William Merrell Vories)

1880.10.28—1964.5.7

カンザス州レブンワース市生まれ。アリゾナ州フラッグスタッフ、さらにはコロラド州デンバーに転住。コロラド大学卒業後、英語教師として日本に赴任するが、伝道のために解職された。以後、YMCA活動を基盤に近江ミッションを立ち上げ、「近江の教化」のために尽力した。その活動は教育（近江兄弟社学園）、医療（ヴォーリス記念病院）、出版（『湖畔の声』）、建築（一柳ヴォーリス建築事務所）、医薬品販売（株式会社近江兄弟社）など幅広い。